

## 運営方法からみた高齢者向けの地域福祉推進事業への参加者促進に関する研究

茨城大学 学生員 ○福永万里香  
 茨城大学 学生員 葛西 紘子  
 茨城大学 正会員 山田 稔

### 1. 研究の背景

急速な高齢化の進展により、高齢者の健康を保持・増進するための政策を充実させることが重要となってきたが、その対象となる高齢者は身体特性や興味・趣向が個人でさまざまであり、政策的に高齢者を集めて何らかの活動を行おうとする場合に、それら個人個人の特性に応じて、きめ細かく企画していくことが重要性である。

本研究で対象とする茨城県日立市においては、学区コミュニティが主体的に市社協の事業の枠内で高齢者向けの活動を行う制度となっており、地域の高齢者のニーズによりきめ細かな対応が期待される。その一方で、地域ごとの担当者の意識や運営のノウハウ・経験によって違いが生じており、これらの特性を分析した上で、より望ましい改善の方向を示していくことが求められている。

### 2. 研究の目的と方法

本研究では、これらの活動の活性度を表す指標として活動への参加率に着目し、それに差異がある2つの地区を選定して、その運営の違いについて整理し、改善の可能性を示すことを目的とした。

### 3. 対象地区における地域福祉推進事業

日立市社会福祉協議会が行っている高齢者向けの地域福祉推進事業のうち、学区コミュニティが実際の運営を行っているものとして、「ふれあい健康クラブ」と「ふれあいサロン」の2つがある。前者は、生活機能が低下している高齢者を対象に介護予防・健康づくりを目的とし、簡単な運動を行うものであり、後者は、外出機会が少ない高齢者の仲間づくりを目的に、参加者同士の交流を促すイベントを実施するものである。詳細は表-1にまとめるが、いずれも市が学区コミュニティに運営を委託している「交流センター」を拠点と

して実施されている。

### 4. 比較対象地域の概要

これらの事業を小学校区のなかで運営しているのは、市社協の下に小学校学区ごとに設けられた学区社協という組織である。それが、学区内の住民で構成されたいくつかのコミュニティ組織と協力体制をつくりながら、高齢者向けの地域福祉推進事業が行っている。

ここでは、行政は制度や財源で主導的な立場ではあるが、直接の運営に関わることは無く、住民主体の活動が各地域で行われている。しかし、コミュニティ意識が高く、社協以外の地区内のさまざまな住民活動が十分に組織化された地区と、比較的協力体制が薄い地区というような違いがあり、それによって、社協の活動の効率にも影響が出ていると考えられる。

効果的な運営方法を行っている一部の地域だけが発展し、地域によって参加者数に差が出てきてしまい、十分にコミュニティや地域づくりといった概念が浸透していない地域が存在しているのが現状である。

居住人口構成や活動規模などの条件が比較的類似している2つの地区で、参加者数や運用効率を比較したものが、表-2である。

ふれあい健康クラブは、市社協から指導員が来て運

表-1 ふれあい健康クラブ、ふれあいサロンの概要

	ふれあい健康クラブ	ふれあいサロン
内容	・健康チェック ・健康体操・指体操・ウォーキング ・レクリエーション、スポーツ ・創作活動	・地域の方々との交流 ・健康体操 ・趣味活動・レクリエーション
開催場所	おもに学区交流センター	交流センター、集会所、個人宅など
回数	月2回	月1~2回
時間	1時間30分	2~3時間
利用料	基本的に無料(食事代や材料費などの若干の実費がかかる場合がある)	学区ごとに、活動に応じて決まっている

キーワード: 高齢者福祉、地域コミュニティ活動、学区福祉、通所型介護予防事業

連絡先: 茨城大学工学部都市システム工学科 〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1

動やゲームを行うため、内容に関しては2地区間ではほぼ変わらない。また、それぞれの地区で開催回数はほぼ同じである。

しかし、この表からは参加者数は、実数、高齢者人口あたりともに、塙山地区のほうが約2割程度大きい結果となっている。その逆に、参加ボランティア数は逆に諏訪地区の方が2割ほど大きく、運営効率に違いがあることが考えられる。

ふれあいサロンでは、塙山の方が開催回数が多く、それに連れて参加者数も多くなっていることがわかる。

本研究では、以降、諏訪地区では活動や運営体制を工夫することでより一層参加高齢者をあつめることができる可能性があると考え、両地区の運営体制の違いについて情報を収集し、整理することとした。

## 5. 運営体制の違い

両地区での運営体制の違いを明らかにするために、関係者へのヒアリングおよび実際の実施を比べた結果、広報の方法や内容、および、送迎サービスの有無で、大きな違いがあることが明らかになった。なお、表-3にその状況をまとめる。

まず、参加者の誘い方は、学区コミュニティが発行するチラシ(通常、市報などと一緒に各戸配布)や、役員等が対象者に直接声かけを行っており、両地区ともヒアリングでは効果があるとされている。

広報のチラシは、諏訪地区では年5回実施されているが、発行時期は不定期である。それに対して、塙山地区では毎月の発行である。内容では、諏訪地区は過去のイベントの報告や代表者が執筆する記事がほとんどであり、また発行間隔が長いので少し古い報告記事も載ることになる。一方、塙山地区では、前月に行ったイベントの報告が全体の4分の1程度の紙面で、残りはこれから行われるイベントへの案内が占めている。またふれあい健康クラブやふれあいサロンのスケジュールは交流センター開催分について、毎回同じ場所に2ヶ月分のイベント内容の予定が掲載されている。

このように、月1回の定期的な発行が、住民にとって身近に感じ、読みやすいというメリットを生じさせている。それがイベント参加への傾向にも影響しているものと考えられる。

さらに、塙山地区では送迎サービスを実施している。これは9人乗りのジャンボタクシーを利用し、乗り合

表-2 2地区での運営実態の比較 (H17年度)

		諏訪地区	塙山地区
人口		7130	7414
高齢化率		18.2	17.1
ふれあい健康クラブ	開催場所	交流センター	
	開催日	第2,4木曜	第1,3木曜
	開催回数	23	22
	参加者数	659	795
	ボランティア数	317	261
ふれあいサロン	開催場所 開催日	集会所 (第1,3月) 個人宅1 (第2,4月) 個人宅2 (第2火)	交流センター (第2,4木) 集会所1 (毎水) 集会所2 (第2月)
	開催場所数	3	3
	開催回数	52	84
	参加者数	902	1438

表-3 2地区での「ふれあい健康クラブ」の運営体制の比較

		諏訪地区	塙山地区
広報媒体		各戸配布のチラシ および役員等による直接の声かけ	
案内が掲載されるチラシの発行状況	発行回数	年5回	毎月
	内容	実施イベントの報告が中心	イベントの予告が中心
送迎サービス	「ふれあい健康クラブ」の掲載	不定期	2ヶ月分の内容の予定を必ず掲載
	方法	なし	タクシー会社に委託
	利用料金		片道1回200円
利用者数	毎回10~15人		

わせで、一人1回片道200円で家の近くから交流センターまでにかけて送迎するサービスを、毎回2便運行している。平成17年度は、平成18年度前半は、11回往復で延べ470回の利用があった。1回の開催当たり平均10.6人が利用していることになる。この人数は、各回の参加者の2割程度に相当する。

一方の諏訪地区においてはこのようなサービスが存在しなく、徒歩あるいは家族等の送迎により開催場所まで行けることが参加者の条件になっている。実際には両地区とも家族が送迎するようなケースは稀であり、送迎サービスの影響が小さくないものと考えられる。

## 6. まとめ

本研究は、学区コミュニティが運営する高齢者福祉イベントについて、実態比較から効率的な運用に影響する要因を明らかにした。今後利用者の意識にも配慮して、望ましい運用方法を検討する必要がある。